

第7次エネルギー基本計画に使われたシナリオスタディ（2）

角 和 昌 浩 （かくわ まさひろ）

要約 前回にひきつづきシナリオプランニングの理論と手法を踏まえて、資源エネルギー庁が2024年秋、および2004/05年に行ったシナリオスタディについて考察する。「アプローチの選択」、「シナリオストーリーを数字・数表表現で語ることの問題」、「同床異夢の便利」、「科学技術シナリオは好まれる」という4つの論点を読者諸賢に問うてみたい。
今、我が国の官民関係に変化が見られる。日本企業は自分で未来のビジネス環境を探索し始めている。シナリオ思考の活用が進んでいる。

まえがき

資源エネルギー庁（以下、「資エ庁」）は昨年12月、第7次エネルギー基本計画（案）を公表し、本年2月18日に閣議決定された。このエネルギー基本計画の準備作業である長期エネルギー需給見通しの検討にはシナリオプランニングが活用されている。前回投稿では今回の需給見通し検討作業を、これに先行した2004/05年のそれと比較して分析した。2004/05年の検討でもシナリオプランニングが使われたゆえである。

なお、本稿の考察・分析は、あくまで筆者個人によるもので、必ずしも、政府（資エ庁）及び、検討作業に関わられた諸機関の見解・見方を表したものではないことに留意されたい。

最初に、2024年と2004/05年のシナリオスタディの対比表を掲げます。詳細は前回投稿を参照してください。

さて、これからシナリオプランニングの理論と手法を踏まえて、資エ庁が今回2024年と、20年前の2004/05年に行ったシナリオスタディについて考察していきます。「アプローチの選択」、「シナリオストーリーを数字・数表表現で語ることの問題」、「同床異夢の便利」、「科学技術シナリオは好まれる」という4つの論点を読者諸賢にお諮りします。

第1の論点は、シナリオ思考で用いられる「アプローチ」の一般解説から敷衍します。

第2の論点は、シナリオスタディと長期エネルギー見通しとの“接続”についてのお話し。

第3の論点は、エネルギー問題に関わる様々な関係者が、資エ庁が発表する“公式の”シナリオ作品のなかで、それぞれに安息所を得ている、というお話しです。

第4の論点「科学技術シナリオは好まれる」は、2024年シナリオスタディの分岐点、すなわち未来の重要な不確実性を「2040年時点のCO₂削減技術の開発・普及の遅速？」と選択したことに係わる問題を考えます。

	2024年シナリオスタディ	2004/05年シナリオスタディ
作成時期	2024年10月 - 12月	2004年夏 - 2005年夏
作成方法	複数の専門研究機関にスタディを発注	資エ庁担当官の旺盛な参加 エネ研/シェル社の支援
シナリオの射程	2024年 - 2040年	2005年 - 2030年
シナリオスタディを採用した動機	2024年秋のIEAの見解「将来のエネルギー需給の姿に対して単一の見解を持つことは困難」を、資エ庁が取り入れた	資エ庁は従来、“公式の”長期エネルギー需給見通しを発表していたが、その弊害に気付いた